

3. 2. 5 まとめと今後の予定

(1) まとめ

大学等が行った大深度弾性波探査の神奈川測線上の点（神奈川県足柄平野）で深さ 2,000 m級のボーリングを掘削した。音波検層、密度検層、垂直地震波探査等により各地層の直接測定を行った。自然地震データを利用してトモグラフィ手法により 3 次元速度構造を得た。地震分布等からフィリピン海プレートの形状について考察を加えた。繰り返し地震の解析を行い、フィリピン海プレートの歪み解放様式に関する知見を得た。またボーリングから得られたコア、スライム等から地層対比を行い当地の地質構造などについての考察を行った。

調査後のボーリング孔を活用して高感度地震計・強震計を地震基盤に設置し、防災科学技術研究所の高感度地震観測網（Hi-net）等と一体的な運営のもと、自然地震の観測等を高温環境下で安定して行うため、孔底温度に適合するよう観測センサーの調整等を行い、次年度実施する定常的観測に備えた。

(2) 今後の予定

平成 16 年度の事業計画・研究計画は次の項目を予定している。

(a) 大深度ボーリング掘削，検層図の解析

都市域の地下深部の弾性波速度の直接測定を行い近畿圏の強震動予測の高度化に資するデータを得るため、京都盆地、大阪平野にて地震基盤に達する（堆積層を貫く）大深度ボーリング（1,000m級）を各々の地域において実施する。

(b) 孔井付近速度構造調査および孔井内速度構造調査

(a)の大深度ボーリングの検層等の結果と、地震基盤から地表までの P 波・S 波速度等を検層や垂直地震探査（V S P）により計測する。

(c) 大深度ボーリング試料による地質年代調査

(a)の大深度ボーリングから得られた試料（コア・スライム）を用いて、微化石分析により、地層の地質年代を明らかにする。また、防災科学技術研究所や産業技術総合研究所において蓄積されている試料（コア・スライム）について同様に地層年代を明らかにし、地震防災に密接に関連する首都圏の堆積層の構造やその成り立ちを解明する。委託（産業技術総合研究所）

(d) 大深度ボーリングによる調査結果の分析・整理

(a)から(c)までの結果と、防災科学技術研究所において蓄積されている大深度ボーリング（深さ 2,000m級）、構造調査等の結果や東京大学地震研究所が担当する大深度弾性波探査の結果と合わせて解析することにより、地下の堆積層の分布を明らかにする。

(e) 高感度地震計・強震計による自然地震観測

調査後のボーリング孔を活用して高感度地震計・強震計を地震基盤に設置し、防災科学技術研究所の高感度地震観測網（Hi-net）等と一体的な運営のもと、自然地震の観測等を行うとともに、防災科学技術研究所において蓄積されている自然地震観測データ等の既往データとあわせて解析し、地震発生様式等を明らかにする。